



## 問いづくり

子どもたちの「わからない」「もやっと」を大切に単元をデザインする。

- ①わからないを表明することはOK  
わかったつもりにならず、わからないことを認める。
- ②わかるために何が必要か＝作戦会議  
見方・考え方（わかるための武器、アイテム、攻略本）を働かせて、どう取り組めばよいか。

だからといって、子どもたちで考えたことだから何でもOKではなく、単元の目標、つけさせる力に導くことを忘れない。

## 「わからんベース」の授業展開

子どもたち全員が同じ方法（作戦）で問いと向き合う必要はない。

今回の単元であれば、事例の補足、書き換え、アンケートの実施など。

子どもたちが批判的に本文を読む  
⇒なんでこんな書き方にするのか？  
「わからない」から「わかる」ための手立てを体験することにつながる。

## 自立した読み手

ここでの自立とは、「これまでの経験、学んだことを生かす」こと。

本文を読んだとき、おもしろいだけでなく疑問を浮かべたり、これまで出会った教材と比較したりできる読み手を育てられる授業作り⇒考えのズレから対話の質を高める。

本文に反応して、関連付け、立ち止まれる読み手を育てることで、多様な考えを生み出す姿が期待できる。

## 「対話ベース」のコミュニケーション

子どもたちがわからないを表明し対話するためには、6年間を見通した系統性が大切。

低学年：「すごい・たいへん・かしこい」などの情的反応を言語化する。「見つける・数える・探す」

中学年：なんでだろう？ ほかに？ 言語化  
筆者の書きぶりをふりかえる活動を多く取り入れる。

高学年：わからない・もやっとをベースとする。  
もっとわかるためには？ 筆者は本当に正しいのか？